

2-8-1 上顎顎欠損補綴処置において鼻孔に維持を求めた1症例

○竹内 快

東京歯科大学有床義歯補綴学講座

A case of Dento-maxillary Prosthesis Using Undercuts in Cavity of Nostril for a Maxillary Edentulous Patient

Takeuchi K

Department of Removable Prosthodontics and Gerodontology, Tokyo Dental College

I. 緒言

上顎エナメル上皮腫摘出後に生じた顎骨欠損に対し、鼻孔に維持を求めた顎義歯を装着することにより良好な経過が得られたので報告する。

II. 症例の概要

患者は75歳男性。平成21年に他院にて上顎エナメル上皮種による上顎骨右側および左側部分切除術を受け、その後同院にて上顎顎義歯を装着した。平成23年頃より咀嚼、会話時の義歯の動揺が大きくなり装着が困難となったため、当院顎顔面補綴外来を受診となった。上顎は無歯顎で右半側および左半側部分欠如のHS分類H₀S₁D₀T₄であった。

III. 治療内容

顎義歯新製にあたっては、維持力を欠損腔の前

方および後方のアンダーカットに求める設計とし、前方維持部は鼻孔外部より維持装置を挿入するツープースとした。後方維持部を付与した顎義歯を完成させ、義歯を装着した状態で鼻孔内部の印象採得を行い前方維持部を作製した。装着日に着脱指導、練習を充分に行った。

IV. 経過ならびに考察

装着1週後に欠損腔辺縁部の疼痛を訴えがあったが塞子部の形態修正と咬合調整を行ったところ症状の改善をみた。着脱に関する問題は生じなかった。開口時の義歯の脱離は認められず装着3週後には咀嚼、発音障害改善を認めた。複数方向のアンダーカットを利用したことで維持力が確保され、機能回復に繋がったものと考え。現在、装着後3年経過し良好な経過をたどっている。

2-8-2 前装鑄造冠ブリッジを応用した両側唇顎口蓋裂症例

○三宅 菜穂子

東京歯科大学口腔健康臨床科学講座歯科補綴学分野

A Fixed Partial Denture for Cleft Lip and Plate : A Case Report

Miyake N

Division of Prosthodontics, Department of Clinical Oral Health Science, Tokyo Dental College

I. 緒言

東京歯科大学では、唇顎口蓋裂患者は出生時より一貫したチームアプローチの流れにのり、下顎骨の成長を考慮し高校卒業前後に、矯正科から欠損部位に対する補綴治療を依頼されることが多い。今回、両側唇顎口蓋裂による反対咬合の矯正治療ののち、前装鑄造冠ブリッジによる補綴治療を行った症例について報告する。

II. 症例の概要

患者は16歳の女性、前歯部欠損部位に対する補綴治療のため紹介された（平成14年5月）。両側唇顎口蓋裂で#12、#22欠損、左側顎裂部には2歯分のスペース、顎裂部に瘻孔認められ、咬合・口腔内清掃状態は良好であった。

III. 治療内容

年齢が若く、歯髓腔髓角部の位置が高いため、

支台歯形成量が少ない部分被覆冠をブリッジの支台歯装置に選択し、平成14年7月暫間補綴装置とし装着した。平成16年11月#21部分被覆冠脱離したため、除去・再形成を行い、平成17年11月前装鑄造冠ブリッジを最終補綴装置とし装着した。

IV. 経過ならびに考察

平成15年11月口唇形成術、平成18年12月残遺孔閉鎖手術を受け、現在、最終補綴装置装着から9年1ヶ月が経過した。平成22年1月、#21に感染根管処置を行ったものの、前装鑄造冠ブリッジの装着状態は良好である。今後も引き続き経過観察を行う予定である。

V. 文献

- 1) 大山喬史編. 口唇顎口蓋裂の補綴治療. 東京: 医歯薬出版; 1997, 132-141.

2-8-3 顎堤吸収の著しい無歯顎患者に対し治療用義歯を用いて全部床義歯を製作した症例

○鈴木英史

東海支部

Complete Denture treatment for edentulous mandibule with severe ridge resorption utilizing treatment denture : A Case Report.

Suzuki E

Tokai Branch

I. 緒言

顎堤吸収の著しい無歯顎患者に対しフラットテーブルを付与した治療用義歯を使用して全部床義歯を製作し良好な結果を得たので報告する。

II. 症例の概要

患者は59歳男性。上下無歯顎。義歯の維持力不足と長時間使用時の疼痛を主訴に来院された。下顎顎堤は著しく顎堤が吸収しており不動粘膜部はかなり限られた面積しかなく、上顎前歯部には広範囲なフラビーガムが認められた。床面積の不足と咬合咬径の低下が疑われた。

III. 治療内容

上下顎ともに無圧的印象採得を行い、治療用義歯を製作した。現義歯の咬合が不安定であったため、フラットテーブルを用い水平的な顎位の評価を行った。軟性裏装

材を使用し、可及的に床面積を拡大しティッシュコンディショニングを行った。機能的に問題ないことを確認し、治療用義歯を用いて最終印象、咬合採得を行い、最終義歯を製作した。

IV. 経過ならびに考察

本義歯装着後リコールを定期的に行っているが、良好に経過している。治療用義歯を用い動的印象を行うことで、咀嚼、嚥下、会話などの機能を十分取り込んだことが良好な結果につながったと考えられる。

2-8-4 上下顎インプラント除去後無歯顎症例に対し安定をはかった一症例

○西山留美子

慶應義塾大学医学部歯科口腔外科学教室

A case report of prosthetic treatment for a edentulous patient after removal operation of dental implants

Nishiyama R

Department of Dentistry and Oral Surgery, Keio University School of Medicine

I. 緒言

上下インプラント周囲炎に対し、抜去時期を分けることで、安定した咬合状態を保ちつつ下顎歯槽骨吸収に対しインプラントオーバーデンチャー、上顎は総義歯にて対応した症例を報告する。

II. 症例の概要

患者は55歳女性。両側の顎下部、オトガイ部の腫脹にて当院耳鼻科より紹介され来科。上下顎にインプラントと天然歯が連結されたブリッジが装着されていた。下顎両側臼歯部にはブレードタイプインプラントが埋入され、残存歯と連結されている歯牙も重度歯周炎にて保存困難な状態であった。上顎に関しても急性症状はないもののインプラント周囲炎および歯周炎が著しい状態であった。

III. 治療内容

消炎後、下顎インプラント抜去、残存歯抜歯を行い、創部の治癒を待つ間、咀嚼能力の改善をはかった。抜去後の顎堤は高度に吸収し、上顎のブリッジは動揺し、咀嚼できるが不安定な状態であった。次に上顎ブリッジの除去を勧めるが、患者の希望もあり下顎義歯を先に安定させる目的で、下顎にインプラントを埋入、バーアタッチメントにて安定をはかった。その後、上顎もインプラント抜去及び抜歯を行い総義歯となった。

IV. 経過ならびに考察

義歯装着後約9年経過しているが、顎堤及びインプラントの状態は良好である。片顎毎に外科及び補綴処置をすることで、患者の審美的、機能的障害を最小限にすることができたと考えられた。

2-8-5 多数歯欠損に対し、オーバーデンチャー（全部床義歯）にて対応した症例

○岡田匡史

関西支部

A case report of overdentures in partially edentulous maxilla and mandible

Okada T
Kansai Branch

I. 緒言

多数歯欠損に対する補綴治療には、口腔機能の回復ならびに残存歯の長期保存が求められる。

本症例では、残存歯の歯冠歯根長比を改善し、オーバーデンチャー（全部床義歯）を装着した。

II. 症例の概要

患者は65歳男性で、上顎残存歯の動揺による咀嚼障害を主訴に来院した。残存歯（3212336）は、重度歯周病で、32123は動揺度2-3であった。

III. 治療内容

まず保存困難な312を抜歯し、初診時に装着していた上顎部分床義歯の増歯と修理を行った。

次に213を被覆した全部床義歯と36を支台歯とした部分床義歯を製作した。さらに36を抜髄、16遠心

舌側根を抜歯し、36を被覆した全部床義歯とした。最終義歯として上下顎オーバーデンチャーを製作し、残存歯根面は高さの低いドーム状とした。

IV. 経過ならびに考察

グミゼリーによる咀嚼能率検査（スコア法：0-9の10段階）の結果、初診時：0から最終義歯調整後：3へと回復できた。残存歯の歯周組織は維持され、経過している。本症例では、オーバーデンチャーを積極的に選択することにより、残存歯の負担軽減ができ、良好な経過が得られたと考えられる。

V. 文献

- 1) 前田芳信. 臨床に生かすオーバーデンチャー—インプラント・天然歯支台のすべて—. 東京：クインテッセンス出版；2006, 12-23.

2-8-6 コーヌステレスコープ義歯により装着感と咀嚼機能を改善した症例

○野田 周太郎

東京歯科大学有床義歯補綴学講座

A Case of Cone Crown Telescope Denture for Improvement of Wearing Feeling and Masticatory Function

Noda S

Department of Removable Prosthodontics and Gerodontology, Tokyo Dental College

I. 緒言

上顎義歯の装着違和感および咀嚼障害を起こしていた多数歯欠如症例に対して、コーヌステレスコープ義歯を装着し、良好な経過が得られたので報告する。

II. 症例の概要

患者は59歳女性。口蓋が被覆された上顎義歯の装着違和感および上下顎歯列欠損による咀嚼障害を主訴に来院した。アイヒナー分類はB-4, ケネディ分類は上顎Ⅳ級, 下顎Ⅰ級であった。症型分類にて難易度判定を行ったところLevel Ⅳであった。

III. 治療内容

欠損部顎堤の吸収状態から可撤性義歯による補

綴治療が適応と考えられた。しかし、義歯床が口蓋を被覆する設計を患者が拒否したため、上顎をコーヌステレスコープ義歯とした。下顎は両側遊離端のため、クラスプを用いた可撤性義歯とした。補綴前処置後、口腔内および顎関節部に異常がないことを確認した上で最終補綴に移行した。

IV. 経過ならびに考察

フェイススケールは初診時17であったものが最終補綴装置装着時には1へと改善した。Satoらの咀嚼スコアは初診時50%であったものが最終補綴装置装着時には90%へと変化した。現在装着後3年経過しているが、良好に経過している。本症例にて、口蓋を解放したコーヌステレスコープ義歯を上顎に選択したことが良好な結果に繋がったものと考えられる。

2—8—7 両側性上顎顎骨欠損に対して磁性アタッチメントを用いて顎義歯を作製した症例

○坂根 瑞

愛知学院大学歯学部有床義歯学講座

A Case of Fabrication for Bilateral Maxillary Defects using Magnetic Attachments

Sakane M

Department of Removable Prosthodontics, School of Dentistry, Aichi Gakuin University

I. 緒言

今回、比較的稀な症例である両側性の上顎骨部分欠損症例において、磁性アタッチメントを使用して顎義歯を作製し、良好な経過を得たので報告する。

II. 症例の概要

71歳の男性。2010年6月、開花性セメント質異形成症の診断で、他院にて上顎骨腫瘍摘出術施行。その後2011年4月に下顎にも同腫瘍が発症し、下顎骨腫瘍摘出術施行。術後は食事時のみシーネを使用していたが、手術創が安定してきたため、2011年6月、顎義歯新製依頼により当科を受診した。

III. 治療内容

残存歯は上下顎ともに右側側切歯から左側側切

歯まで残存しており、上顎臼歯部は左右対称的に顎骨欠損が存在し、部分的な穿孔が認められた。

本症例は、両側に粘膜組織のアンダーカットを有する右側栓塞部を製作した後、左側栓塞部と義歯部を一体化した中空型の顎義歯を製作した。また、接合部はアンダーカット部を義歯の維持・安定に活用するため、磁性アタッチメントを使用した分割着脱型の構造とした。

IV. 経過ならびに考察

顎義歯装着後、数回の調整、指導により、顎義歯の維持・安定が得られ、患者自身も容易に着脱が可能となった。また義歯装着後3か月時の咀嚼能力検査では、咬断能力と咬合力の測定および咀嚼スコアを算出し、良好な結果であることが確認された。

2-8-8 各種形態の磁性アタッチメントを適用した全顎的補綴症例

○神原 亮

愛知学院大学歯学部有床義歯学講座

Full Mouth Prosthetic Treatment using Different Kinds of Magnetic Attachments.

Kanbara R

Department of Removable Prosthodontics, School of Dentistry, Aichi-Gakuin University

I. 緒言

本症例は、各支台歯の臨床状態を考慮に入れた磁性アタッチメント義歯を設計し、磁性アタッチメントのみを支台装置として全顎的な補綴処置を行った症例である。

II. 症例の概要

患者は83歳女性、「噛めない」「見た目が悪い」を主訴として来院した。症例の概要は、上顎両側性遊離端欠損、下顎多数歯欠損により、左右臼歯咬合が喪失し、それに伴う咬合位の低下および歯列不正による咀嚼機能障害、審美障害である。

III. 治療内容

まず、上下顎残存歯の負担能力、保存の可否について診断を行い、その後診断用ワックスアップ

を用いて最終補綴装置の設計および審美的回復について患者と相談を行った。上顎には、プロビジョナルレストレーションおよび治療用義歯を装着し、下顎には、残存歯の臨床状態を考慮に入れ、オーバーデンチャータイプの治療用義歯を装着した。機能的、審美的に問題がないことを確認後、最終補綴装置として、上顎には陶材焼付铸造冠に歯冠外磁性アタッチメントを適用し、下顎には根面板型磁性アタッチメントおよびMT冠を用いた。

IV. 経過ならびに考察

最終補綴装置装着後、患者からは機能的、審美的に高い満足が得られた。機能評価としては、検査用グミゼリーによるグルコース量および表面積増加量共に、有歯顎者に近い咀嚼能力が得られた。現在、術後5年であるが、経過は良好である。